

妹! 妹!!!  
MAI MAI

夜士郎

挿絵：ななろば華

立ち読み版



序章

第一章

妹の増えた日

007

第二章

エレンのほけんたいいく

034

第三章

ちっちゃい妹悪だくむ

073

第四章

お兄ちゃんじゃなきやイヤ!

101

第五章

わたしとエッチしてっ!

137

第六章

シスターパラダイス

195

終章

249

## 登場人物紹介

Characters



さかがみ しゅんいち

### 坂上 俊一

どこにでもいる普通の学生で  
家族思いの少年。この頃反抗  
的な妹・遥に手を焼いている。



さかがみ はるか

### 坂上 遥

俊一の妹のツインテール少女。負けん気の強い性格で、兄に対して反抗的な態度をとってしまうことも。巨乳。



かわい はな

### 河合 エレン

西洋人の父の血を引くハーフの少女。学園で注目を集める美人だが、知能のほうは小学生並み。金髪。



かわい はな

### 河合 花

エレンの双子の妹で、黒髪の女の子。いつも姉の面倒を見るしっかり者だが、腹黒な側面も？ ロリ体型。

「うるっさああああい！ そうならとつと追い出しやがれえっ！」  
「ごもつともゴブツッ！」

喝破とともに飛来するドライヤーに鼻面を押し潰されて長兄は豚のような悲鳴を上げた。というかコードが繋がってたら感電して死んでるぞコレ。

「ほら行くよエレンっ！ 女の子がはしたないっ」

「えー！ やだ、あにいとお風呂、あにいとお風呂お！」

ずるずると引きずられていくエレンを見送り、鼻を押さえながら俊一は呻く。

（た……助かった。やばいとこまでずるずるいつちまいそうだった……）

安堵する。エレンは妹なのだ。もう他人じゃない。そうだったのだ。

だから興奮してはいけないと、必死で己に言い聞かせる。だが裏腹に、その怒張は焦げつくほどの熱を帯びて固く固く硬化してゆく――。

終業のチャイムが鳴って、かなりになる。教室の外はもう薄暗い。

そんな時刻に俊一はひとり、教室に居残りて課題を片づけていた。

昨日。寝る前に片づけようと思っていたのだが、エレンの裸がちらついて、まるつきり手をつけられなかったのだ。いっそオナニーでもしてこの悶々としたものを解消できればよかったのだが、義妹の裸でヌクというのはなんだかひどく悪いことのような気がしてできなかつた。エロ画像を開いて動画を再生しても、そこに映る女性の裸体がエレンのそれ

に見えてしまつて、結局のところ、ただ欲情を抱えたまま眠るしかなかったのである。

それが現在の有様というわけだ。情けなくつて涙も出ない。

「やれやれ。ようやくと終わるか。けっこうかかったなあ」

妹たちには、帰りが遅くなると伝えてあるから、もうとつくに帰っているだろう。

教師は自分の仕事があるから、終わったら職員室に來いと言つていた。校内は静かだ。部活の時間も終わりをすぎている。誰も残つていないのだろう。

椅子を軋ませて、さあ帰ろうかと立ち上がった、そのとき。

教室の扉を開いて、金色の燐光が飛び込んできた。

「あにいつ！ べんきょう終わったつ!!」

「んをつ!! え、エレンつ!!」

ニコニコ顔で駆け寄つてくるのは我が義妹。丈の足りないスカートが、ひらりと舞う。

「おいおい。待つてくれたのか、こんな遅くまで？」

「うんっ！ あにいにね、教えて欲しいことがあったのっ」

机の正面に回り、手を乗せて、身体を突き出してくる。ふわりと香る、甘い匂い。柔らかそうな膨らみが、制服の胸元をぐつと押し下げている。

（う、や、やべっ……）

それだけで、股間に血が集まつてきた。溜まりに溜まつた青い情欲がもぞりと蠢く。柔らかかそうな身体。制服は全体が小さめで、そのボディラインに張りついている。

(落ち着け、落ち着けっ……！ 妹相手に欲情すんな、俺っ……！)

必死で自分に言い聞かせる。兄なんだから自重しろ、と。

「あにい、聞いてるー？」

「お、お悪い。んでなんだ、教えて欲しいことって。勉強か。家に帰ってからも……」  
「だってすぐに知れたかったんだもん。花ちゃんもそのほうがいいってゆーし」

(……花が?)

それなのに、双子の姉を一人学園に残して自分は帰ったのか？

「あー、まあいいや。んで？ わからないところってなによ？」

訊く。するとエレンは左右の人差し指をくつつけて、恥ずかしそうに。

「えっと、えっと、なんだっけ。ああ、そうだ。……ねえ、あにい。赤ちゃんのつくりかた……いもうとのおまたに、教えて？」

なんてまた、とんでもないことを言い出しやがったのだ。

「ゴブオッ！」

「ああっ！ あにいが燃え尽きたボクサーみたいにつ！」

衝撃に、椅子にくずおれ灰になる。なんてことを言うのだ、この妹は。

「……な、なんで……そんなコトを聞きたいんだ？」

「んっ……どんなふうにするのか、あにいに聞きたいの……だったかな？」

「ど、どんなふうって……」

目の前にある、柔らかそうなエレンの身体を見やり、生唾を呑み込む。

薄暗い教室の中でさえ輝くような夏の制服は、薄手の生地日本人離れした肢体を浮かび上がらせて、眩いエロスを奏でていなのだ。

脳裏に浮かび上がる裸体が目の前のと重なって、鼓動を高めてしまう。

「ねえねえ、あにい？ 男の人が、赤ちゃんの素を出すってほんとなの？」

無邪気に訊いてくる。というか、高等部にもなってそんなコトも知らないのか。こんなことを、異性に平気で訊いてくるようだ。と、父親属性も多分にある俊一としては、彼女がまともな性知識を得て成長してくれるのか心配になってくる。

「あ……ああ。ほんとうだ。男が出す素と、女の子が出す素がくつついて赤ちゃんになるんだ。それが、受精っていう。習ったろう？」

「うんっ。ねえあにいっ、エレン、それ、見てみたいっ！」

などとエレンは、無邪気な顔でせがんでくる。

「そ、それって……赤ちゃんのもと？」

「うんっ！ みたいみたいっ。ねえあにい。お願い、赤ちゃんの素を見せてっ」  
艶めく桜色の唇から、そんなおねだりを聞かされて、頭の中が桃色に染まる。

「いや、待てっ……！ そ、んなのっだめだっ！」

焦って叫ぶ俊一であるが、少女は肢体をずっと近づけて。

「ええと、なんだっけ……。お願い、あにい。エレン、あにいの赤ちゃんの素が、どぴゅ

どびゅって出るところ見たいの。いもうとの前でびゅうびゅう出して欲しいの」

擬音を混じらせたおねだりが、俊一の脳をとろかせる。

(だめだ、だめっ……だけど、でもっ……そのくらい、なら……)

ただでさえ抑えがたい情欲が、煮凝りのように沈殿していたのに、エレンの愛らしい声はそれをぐずぐずに溶かして理性の上に塗り固めてゆく。

(ま、まあ……それに、射精しさえすれば、エレンも収まるだろうし……)

「わ……わかった。いいぞ……お、教えて……やるよ」

ぐびぐび唾を嚙下しても、カラカラに干上がった喉は潤わない。

エレンを椅子に座らせて、俊一は机に腰掛け対面する。ズボンのジッパーを開くと、すでに熱く隆起した肉塊がパンツをぐぐつと膨らませていた。

「なあエレン。コレ、なんだか知っているよな？」

訊く。するとエレンは頬を桃色に染めて、

「う……うん。お、おちんちん……だよね？」

頷いて、パンツをずらす。むわりと吹き上げる熱気とともに、性血の充填された肉ソーセージが股座からぴいんと元気よく立ち上がった。

変わり果てたマイサンを見てエレンが驚いたように目を開く。

「え、えええっ！ あにい、ここ、すっごいへんなかたちになってるよ？」

「ああ。これが、赤ちゃんを作るための形なんだ」

赤黒い体表は鼓動にあわせて打ち震え、表面を駆ける血管は青黒くえぐいほどに浮き上がっている。亀頭の膨らみは張りつめて、蛍光灯の明かりにつやつやと輝いている。

グロテスク極まりない、男の象徴。それがエレンの無垢な碧眼に映っている。

「ふああ……すごおい、おつきい。それに、ビクビクしてる……」  
遠慮もなしにじろじろと、不躰な視線が肉肌を撫でる。

(し、視線に……触られてるみてえだ)

生まれて初めて、性的な目的で女の子に己の排泄器官を見せつけている。

さらに言うのならその相手が、血は繋がっていないとはいえ妹だということ。その現実がなおのこと、情欲を掻きたてるのだ。

イケナイことをしている高揚感に、鼓動はなお高まっていく。

故に、興奮の坩堝くわぼにある肉根からドロリと我慢汁が溢れるのも致し方ないだろう。

「ね、ねえ？ さきつぽから、とうめいなのがでてきたよ？」

肉棒の先端から溢れる透明蜜を目にして、エレンは興味津々といった感じだ。

「ああ……それもな、赤ちゃんを作るときに出るものなんだ」

「そうなんだー。ねえあにい。これ、触ってみてもいい？」

そう言いながらの彼女の手はすでにわきわき近づいていた。

(触る……エレンが、俺の、チンポに？)

どきんと心臓が跳ねた。震えるように頷くと、白魚のようという形容がこれほど似合う

指もそうそうないだろう、小さく綺麗な織指が、おずおずと欲望の塊に触れてきた。

——ゾクリッと、背中を怖気おぞけが撫でていく。

「くはっ……！」

「きゃっ！ ビクつてなったビクつてなった！」

ちよんと触れた指先をエレンが引つ込めた。大丈夫だと頷くと、妹はまた手を伸ばす。

「すごい、これ、あつよいよお……？ あにい、大丈夫なの？」

「ああ、だいじょうぶ。それよりも、もつとちゃんと触つて、勉強するんだ」

「う……うん。ふああ……おちんちんつて、すごい……」

右の手の平が、男根を包み込んだ。愛らしい妹の指に包まれて、息子が歓喜に戦慄く。

「う、くう……」

少女の桜色の唇からそよぐ甘い吐息に撫でられて、俊一は呻く。

勃起した器官を初めて他者に触られた。指の温度は肉根より低くひやりとしていた。

（女の子の、指がっ……俺のを握ってる……）

お尻にきゅつと力が籠もる。もつともつとその感触を味わいたいと、腰が振れた。

「ほら……もつとちゃんと、触つてごらん……」

「う、うん……わかった……」

促すと、五本の指が動き始めた。肉の弾力を確かめるように、うにうに、うにうにと、肉棒を弄ぶ。先端からカウパー氏腺液が溢れ出す。トロトロととめどなく男根を伝い、エ



(やばいつ、もう、出そうだつ……！　こらえ、られねえつ……！)

無垢で無邪気な妹の清らかですべすべとした指に、排泄のための器官をこんなにも熱くしごかれては、我慢などできようはずもない。

「え、エレンっ……もう、出るぞっ……赤ちゃんの、もどっ……！」

呻く。金髪をさらりと揺らし、エレンが小首を傾げた。

「そうなの？　これでいいの？　あにいのおちんちん、苦しそうだよ？」

「あ、ああ……そのままでもいい……そのまま、もつと強くしてくれ……！」

言うのと、エレンは元気な声で「わかった！」と返事して、肉棒奉仕を加速させた。

ぐちゅぐちゅ！　にちゃにちゃぐちゅにちゃ！　勉強のための椅子に座って机に向かつて、目の前の教材に熱中する制服少女はまったく優秀極まりない性徒だ。

快感が吹き上げる。心臓が早鐘を打つ。頭に血が昇り、なにも考えられなくなる。

ただただ、金色の髪を振るわせて、星空に夢見る乙女の精神もそのままで兄の肉欲を絞り出す義妹の指に翻弄されていた。ぶくぶくと精管が膨らむ。両脚がぎつと固まった。

「い、イク……ぞ、エレンっ……っ！　赤ちゃんの素だすからなっ、よく見てろよっ……！　く、うあああ、あああああああっ！」

カクカクツと腰を振るわせて、仰け反る俊一の肉ホースから汚濁の塊が噴出する。

どびゆるうううっ！　びゆるるるっ！

「きやああつ！　な、なにつ、すご、いっばいつ……んぶっ、んぶぶぶっ！」



ついつい本音を返してしまった俊一を、花が雰囲気読めやコラみたいな目で睨む。

「妹の処女を捧げたのに、それはないと思う……」

「あ、いやわりい。でもなあ」

と、少女の胴体、脇の下あたりを左右から掴む。コントローラーを握るような要領だ。たったそれだけで両手の親指が、未熟なグミの実に届いてしまう。細い。細くて、華奢だ。小動物を抱いているみたいで、乱暴をすれば壊れてしまいそうだ。

すり、すりすりっ……親指で、乳首を擦ってみる。

「あっ……ふああっ！ んっ……！」

鈴を転がしたような声がその小さな唇から漏れ出した。桃色のポッチを右に左に上と下にと擦るたびに、肋骨を震わせて甘い声音を聞かせてくれる。

「あにさま……ふああっ……花のひんにゆう、いじらないでっ……」

ふるふる、ふるふる、花の黒髪が揺れる。乳首ポッチをぐにぐにゆぐにゆ動かしていると、握っている身体がじわじわと熱くなっていく。

「敏感なんだな……やっぱり小さいと、そうなのか？」

「も、もうっ！ ンッ……そ、そんなことを言うあにさまには、おしおき。えいっ！」

と——花が腰をぐいっと前後に動かした。狭隘な肉感に包まれている男根が、少女の身じろぎに圧迫されて、まるで身体中を潰されるような衝撃に俊一は呻き声を上げる。

「~~~~う、ひっ、ひっ……は、はあっ……！ ど、どお、あにさまっ……」

「くっ……！ どう、つていうか……むしろダメージが大きいのは、お前だろっ」

たった一度腰を動かしただけで、もうガクガクに膝を震わせている花にツっこむ。ペニスにかかる強い圧力は要するに、拡張される膣肉側の悲鳴なのだ。

ぐ……ずじゆ。ぬっ……ぐぶ、ぐぶぶっ……。

「ふああ……ひあっ！ あにさま、あにさまっ……」

少しずつ少しずつ、花は慣らすように腰を揺らす。膣奥からとドクドクと、熱い液体が滑り落ちて俊一の分身に降り注ぐ。とめどなく溢れ出す潤滑油で、陰毛までネトネトだ。

「っ……くううっ！ 花のなか、き、きつすぎっ……ぐうっ」

「ふふっ……あにさまのおちんちん、なかでピクピクしてる……嬉しい嬉しいって、かうばーどんどんでる……妹に突っ込んでるのに、あさましいおちんちん……」

「つく、ううっ……あさましいとかっ……いくなっ……」

苦しげに諫めるも、能面少女の瞳はどこか愉しげだ。

「あにさまっ……きもちいい？ いもうとの、ちっちゃなおま○こ、きもちいい？」  
ズクンツとペニスが疼く。そのセリフのどこかに反応して肉根が鼓動した。

「んふうっ……ふふ、中でピクンつてした。ね、ねえ……あにさま。いま、あにさま、いもうとのアソコを犯してるのに。んっ！ ……血は繋がっていないけれど、家族になっちゃったいもうとの、お・ま・○・こを……」

花の声音は、蛇が絡みつくようであった。その蛇は牙を持ち、俊一の喉首に噛みついて

強烈な毒を流し込んでくる。

「ふ、ふふ……いもうとって言うたびに、どんどんカタクなる……情けないあにさま」  
(こ……このっ……!!)

怒りたくても怒れない。まったくもってその通りなのだから。

花の流し込んだ、妹萌えという毒に、全身、ペニスまで侵されてしまった。

ねっちゅ、にちゅちゅ……義妹の膾肉にぎゅうぎゅうされて、痺れるような快感に横隔膜が震える。足指の先まで固まるような悦楽を享受しておいて、反論などできなかつた。

「あんっ……こ、こどもま○こなのにつ……あにさまので、なかズボズボされてるっ……ぐりぐりって擦ってっ、おく、おくまで届いてる……!!」

震える喉から扇情的な甘声が漏れる。しどけなく崩れた肩を兄に擦りつける、純潔を散らされた少女の能面は、柔らかく、うっとり蕩けていた。

「ふあっ……んくっ……せ、せーし、出したいんでしょう？ あにさま、キタナイおちんちんでいもうとをずぼずぼして、中にどびゅどびゅしたいんでしょう……ふふっ」

——ああ、その通り。

睾丸がキュウキュウ啼ないている。欲望の煮汁が、ペニスの付け根に溜まっていく。

だが、このままあえなく射精して終わることはできない。花にイニシアチブを取られたままでは終われないのだ。なんというか、でないところから先が非常に不安だ。

なんとかしないと——と、思った、そのときだ。

「……むにゃ？ あにい？ 花ちゃん？ なにやってるのお……？」

眠たげに目を擦りながら——エレンが身体を起こしていた。

(チア——イスタ——イミンッ！)

「え……エレンっ……なんでもない……のっ！ いいから、眠ってっふにゃあああっ!!」

目を覚ましかけているエレンに向けた花の音が、嬌声に入れ替わった。強引に、身体を百八十度回され後ろを向かされて、少女の内部肉がぐりんと捻られたのだ。

「あ、あにさまっ……なにをっ……」

「ふにゃ……むにゃ……あにい……？ どうして花を抱っこしてるのお……？」

正面から見れば、花を脚の上に乗せているようにしか見えないのだろう。俊一は、寝惚け眼のエレンによく見えるように、膝を開いた。花の細脚も大きく開く。

「ほら、こつちに来てみな、エレン」

手招きをすると、エレンは四つんばいでふらふら近づいてくる。

「なあエレン？ ここ、どうなってる？」

「むにゅ……あにいのおちんちんが、花にささってる……ううううううう!!」

と、ようやく目を覚ましたのか、ビックリ顔のエレンが結合部に顔を近づけてきた。

「ふああ……せつくすだ。あにいと花、せつくすしてる。すごおい、あにいのおちんちんが、花のおちんちんにずっぷりささってる……」

「あ……え、エレンっ……そんなに、見ないで……」

双子の姉に見られるのはさすがに恥ずかしいのだろう、花は乏しい表情にも羞恥の彩を含ませる。背けた顔は耳の先までほんのり赤く染まっていた。

「だってだって、すごいよ？ 花のアソコ、こおんなに小さいのに、あにいのおちんちんでまん丸に広げられてるんだもん。うわあ、アソコ、真っ赤つか」

きゅっ、きゅっ、エレンの言葉に反応したのか、膣肉が収斂しゅうれんを繰り返す。

「あにいの、おつきいおちんちんで、花のおまたをぐちゃぐちゃにこわしてるみたい……」  
「んっ……ふああっ……エレン、も、もうっ……言わないでっ……！」

花が首を背ける。その青い瞳が、トロロンと熱く潤んでいることに気づく。

「……エレン。覚えてるか？ 気持ちいいスイッチ」

俊一の言葉に、花がコクンと頷いた。

「それを触ってあげるんだ。喜ぶぞー、花ちゃん」

「うんっ！ やってみるっ！」

「ちよ、あ、あにさまっ！ だめ、い、いまはっ……くひいっ！」

抗議の顔を上げかける花だが、エレンの白魚の指先が敏感神経の塊をぎゅむつと押すと途端にビクンッと顎先を跳ね上げる。その様子を見て、エレンが嬉しそうに、

「すごいクルよねっ！ 気持ちいいスイッチ。エレンもあにいに弄ってもらったんだあ」

と、玩具で遊ぶように楽しそうにくりくりつと指先をこねくつた。とたん花の細くしなやかな両足がぐつと前方に伸ばされた。いやいやをするみたいに、首を振る。

「んきゅうっ！ ふああっ！ つ、潰れるっ……私のおマメ、潰れちゃうっ……！」

仰け反る身体、お腹がぐうつと浮き上がって、肉根のカタチまでぽっこりと見えた。

「花ちゃんの気持ちいいスイッチ、ぷくうって膨らんできた。気持ちいいんだねっ」

「や、やめてっ。いま、いまは……んんっ！ クリトリス虐めないでえ……」

くちゆくちゆくちゆくちゆ、エレンの指が双子の妹を責め立てる。小さく尖った肉豆が、潰れひしゃげて引つ張り回され、未熟な身体を右へ左へうねくらせる。

「くひっ……はひっ！ え、エレンっ……もう、やめっ！ おちんちん、ずぷうってささつてるのにつ、しょ、しょんなにこすつたらあっ……んくっう！ なか、なかでっ……！  
ロリま○こ、ごりごりえぐられるっ……！」

振り乱す黒髪が、幼い身体に絡みつく。熱を増す膣肉がぐにゅぐにゅと蠢きながらペニスを責め立ててくる。頭の中が燃えるような快楽に、俊一はたまらず腰を押しつけた。  
ぐちゅうっ！ と鈴口にドーナツ肉がキスをした。

「ひああっ！ あ、あにさまっ……！ そこ、だいじなところなのおっ……！ そ、そんなカタイおちんちんでぐりぐりしちやいやあっ！ んひいひいひいっ！」

膣肉から悦び汁を垂れ流し、美少女は背を反り返らせる。

「うああっ……す、すげっ……！ さきっぽが、コリコリしてるっ……！」

こんな小さな身体にも赤子を産むための器官があるのだと思う。そんな、女の子の大事な場所を乱暴に小突かれて、幼妹の喉から迸る声には、明らかな悦びの色が混じっていた。

「あにさまっ……あにさまっ……あにさまっ！ ん、ああっ！ んうううっ！」  
掴んだカラダを上下に動かしてみる。軽いから、簡単だ。

「ひいっ！ おにゃか、ぬけるうっ！ あ、あにひやまああっ！」

締めつけのきつい小孔から男根が抜けるにつれ背筋が伸びていく。一呼吸もおかず押し込むと「はぎっ！」と悲鳴を上げて目を剥き身体を丸めた。

「あにい、虐めちやダメ。こおんなに小さいオマ○コなのに、裂けちゃいそうだよ？」

可哀想……と、膣肉を兄に責められる双子の妹を慮おもんばかつたのか。エレンは舌を突き出して、花の敏感核をぺろりと舐めた。途端——ビクビクッ！

「りや、りやめええっ！ エレン、舐めるのりやめえ……。んああっ、ひやあああっ！」  
花唇がキュウキュウ縮んで男根を締め上げてきた。

幼貌を赤らめ熱い嬌声を放つ花は、発情した猫みたいに腰をくねらせる。未熟な蕾を無理に開いた黒髪乙女は、そんな小さな身体なのに、双子の労いたわりにも悦でもって応えてしまいうくらい感じまくっていた。

エレンは妹の制止も聞かず、犬のように秘所を舐め続ける。

「ひきゅっ！ んきゅっ！ や、やひっ！ えりえんっ！ はひいっ！」

ぺちやぺちや、ぺろぺろ。敏感神経を唾液まみれの舌肉に擦られて、俊一の手の中で小さな身体がうねくり続ける。まるで、漁師の手から逃れようとする魚のようだ。

「感じるっ……感じすぎるっ……あにさまので中、いっばいなのにっ……！！ カラダ、動

いちやうっ！ やへえっ、エレ……ンっ！ おちんちんぐりぐりするからあ……！」

ちっちゃな足指がグーとパーを繰り返す。肋骨がアコーデオンのようにうねり、あどけない顔は双子の姉と義兄の責め苦に泣き笑いのような顔で悶えている。

ごりゆり、ごりゆ、ぐりいっ！ 未成熟な肢体が暴れるたびに肉根が搾られた。じわじわとこみ上げてくる子種汁が、射精管を膨らませていく。

「くあっ……もうっ……耐えられねえっ！」

ずんっ！ と俊一が腰を突き上げた。「ひっ」と小さな吐息を漏らし、かあつと瞳を開く花。青い瞳にみるみる涙が溜まって、目の端からこぼれ落ちる。

ずつぶ！ ずつぶ！ ぐずぶ、ぐぼっ！

ソファのスプリングまで利用しての上下運動に、軽量ボディが翻弄される。

「んぐううっ！ ふああ！ あにさまっ……奥、奥に刺さるのおっ！ あにさまのカタイの花のしきゅうづぶづぶしてうっ！ しきゅう、つぶれちゃううっ……！」

二人の結合部を必死で追う、エレンの金髪がゆらゆらしている。たまに狙いを外して俊一の金玉までべろりと舐められるのがたまらなくいい。

「んっ……ちゅばっ、くちゅ……あにいの、ずぼずぼ入ってる。すごおい、花ちゃんのオマ○コ、しょっぱいお汁がどんどん出てくる……全然、舐め取れないよ」

花の肌がかあつと赤らんだ。喘ぐ肋骨が蠢いている。握る俊一の両手も汗まみれ。

「あにさまもっ……きもちいいのっ……？ ふああっ！ あにさまのガチガチおちんちん、

膨らんでるっ……あつくて、ビクビクって震えてるっ……ん、くはあんっ！」

可憐な声で喘ぐ義妹の、半熟な身体に肉棒をしごかれて、兄ももはや限界であった。

「あ、ああっ……気持ちいいっ……もう、ダメだっ……出す、ぞっ……！」

「はいっ、はいっ……あにさまの、あついの……花のなかにいっばいちようだいっ……。いっばい、いっばい出して、いもうとのカラダにあにさまの匂いを染みつけて……」

ガクガクと腰が震える。小さな義妹の胎内に汚濁を注ぎ込もうと睾丸が吊り上がる。

こみ上げる射精感に、歯を食いしばり、最後まで抵抗して——果てた。

「うっ……ぐうっ！ 花っ……はなああっ！」

びゅぐるっ！ びゅるううううっ！ びゅっ、びゅびゅびゅ！ びゅばああっ！

擦過され続けた花の青く固い蕾の内側に、欲望の煮汁を存分にぶちまけた。

「ふああああっ！ あにさまの、熱いのっ……いっばいっ……！」

びゅびゅっ！ びゅるうう、びゅるううううっ！

灼熱ザーメンを子宮口にぶちまけられて、華奢な肢体がわななき仰け反る。そんな妹へとどめとばかりに。エレンが敏感肉をちゅゅうううっ！ と吸い込んだ。

「はひっいいいいっ！、え、エレンっらめっ、あにさまのおちんぼ汁、お腹のなかじゅうじゅう灼いてるのにつ！ ひゃああっ！ クリトリスだめえええっつ！」

ガクガク、ガク！ と壊れたみたいに腰が躍った。後頭部を兄に擦りつけながら、襲い来る快美の衝撃に細い顎を跳ね上げる。びゅうびゅうとザーメンを注がれちゅうちゅうと



敏感核を吸われて、花は黒髪を振り乱して悶絶した。

「い……イクっ……ふああイク、あ、あああああつ！」

ブビュ！ ドビュビュ！ ビュルビュブ！ 胎内に注がれ続ける兄の灼熱スペルマに、肩を、腰を、身体中を震わせて、花は絶頂に至ってしまう。

「くくくくくっつ！ イク、うううう——っつ！」

赤らむ総身が蛇のようにうねり、折れそうなくらいに背骨が反り上がる。見上げる瞳から滂沱<sup>ほうた</sup>と涙が溢れ出し、男根に押し出されたように舌をびいんと突き出した。

「ふあああつ……あにさまの、あついっ……いっばいすぎるっ、あふれてしまう…」

肩を、腰を震わせて絶頂感にわななく花。その秘所からゴボゴボと配管が詰まったような音がして、小さすぎる肉壺では許容しきれなかった精汁が溢れ出す。濁った汚汁がパイパンマ○コをびちゃびちゃ穢し、兄妹の脚を濡らしていく。

「あ、あにさま……いもうとのロリま○こ、気持ちよかった……？」

花の小さな手の平は自分の下腹に重ねられて、その中を埋めている存在が愛おしいものであるように撫でている。そうして彼女はまた、俊一の男根を抱きしめたまま、ドキリとするような微笑みを浮かべるのであった。

その嬌態をのぞき見ていた人物に——熱に浮かれた三人は、気づかない。

「あ………ああ、あ………アニキ………おにい、ちゃん………」



遥の、ソックスに包まれている足指がぎゅうつと丸まった。細首は紅に染まり、じゅんわりと汗をかいている。痛そうでも、嬉しそうだ。

みっちり詰まった肉を掻き分けるようにして、ずぶずぶと肉杭を埋め込んでいく。

抵抗はわずかであった。むしろ、ドブドブ溢れる蜜汁は滑りよく、蠢く贅肉は引き込むような蠕動で、タブーを犯すべニスを喜び勇んで飲み込んでいくのだ。

「おにいちゃんのカタくておっきいのでっ……わたしのなか、開いていくよお……。しあわせ、だよお……う！ ふああああん！ おにいちゃあんっ！」

巨乳を震わせわなないている、制服姿の肉壺は熱くてトロトロだ。

——ぶち。ぶちぶち。男根がなにかを押し破る。

「んっ……ふあっ！ 破れ、てるっ……わたひの、しよじよまくう……」

膣壁に、残骸を押しつけながら、俊一の兄チンコは実妹の処女膜を挽き潰し通過する。

遥の腰がぶるると震えた。乳肉に細かなさざ波が駆け抜けた。

「く、ひいっ……！ お兄ちゃんに処女破られて、私、わたし、またあイクッ……！」

ピクピク、ピクピクッ！ 遥の身体が戦慄き小刻みに震えた。桃源にたゆたう遥の顔、その細腰がぐいぐい浮き上がった。待ちに待った兄の男根を迎え入れ、とうとう破瓜までも達することができて、妹は歓喜の絶頂に至ってしまったのだ。

ぬぶずっ……と、金玉までが遥の股間に密着する。

「な、んだこりゃっ……遥の、なかっ……すげえっ……！」

痺れるような快感、声帯すらも思うようにならない。狭苦しい肉壺は、だがキツすぎることもなく、肉鞘をギュウつと抱きしめて、ウネウネ蠢く贅肉で快感を与えてくれる。

「おにいちちゃんの、おちんちんっ……きもひいいっ……」

遥の瞳は潤み、眉尻が垂れて落ちている。その顔に処女を奪われた痛みの陰はなく、ただ嬉しげだ。絡みつく膣肉はきゆうきゆうと、まるで想い人を抱きすくめる恋人の抱擁に似て心地よい圧迫感を与えてくれるのだ。

妹のヴァギナは、誂あつえたように、兄のペニスにぴったりだった。

「えへへ……お兄ちゃんのおちんちん、私のおま〇こに入ってる……。嬉しいよ、嬉しいよ……。お兄ちゃん。大好きっ……!」

頬を染め、口元には笑みを浮かべ、うるうると涙目であった。

嬉しそうな顔だ。あの、小生意気な態度の裏に、こんな顔が隠れていたのか。

兄の肉棒を股座にずっぷり突き刺して、実の妹はこんなにも喜んでる。

それがまた、愛おしくてたまらない。

血の繋がった粘膜と粘膜が擦れ合う。

兄妹ともに禁忌を犯す興奮に、熱い息を絡み合わせる。

「あはっ。お兄ちゃんもすごい、気持ちよさそうな顔……。かわいい」

「うるせ」

にゅりゅうつ、と、腰を揺り動かす。とたん遥の顎がびくんつと跳ねた。

「ふぁあんっ！　はう、おちんちん、おま〇こぐりつて擦ったあつ……！」

顔を仰け反らせ反応する遙。押し広げられた花卉が奥向きに潰れて、ますます赤みを増していた。ずりずり、ずりずり。腰を前後に揺さぶつて、妹粘膜を掻き回す。

「あー、あぁーっ！　こしゅれ、なか、ぐいぐいされてるっ！　んくうううっ！」  
チンコに掻き出され、じゅぼじゅぼと溢れる蜜に、わずかに赤いモノが混じっていて。

——興奮する。にゅぐっ！　ぐっちゅ！　ずぼりゅうっ！

「ひぁあつ、ああつ、あつ！　すごいよおう！　お兄ちゃんのおちんちん、きもひいいよっ！　自分でするのはぜんぜんちがうよっ！　あ、ああつ！　ふぁあぁあんっ！」

ツインテールを振り回すその顔は、初めてのエッチと思えないくらいに淫猥だ。

「なんてイヤらしい顔をしてるんだよ、お前……」

顔面に砂糖汁をぶちまけたような、とろつとろに蕩けた表情だ。兄の唾液に濡れた唇は、ぱっかり開いたままで、官能の熱い吐息か淫猥な喘ぎ声だけをそこから垂れ流している。

産まれてきてずっと一緒にいた妹。怒った顔も泣いた顔も、笑った顔も見ただけ。

禁断の快楽に翻弄される、こんなイヤらしいアクメ顔は、初めて見る。

「いやあ、見ないで、みなっ、ひぎいっ！」

恥ずかしがつて妹が、両手で顔を覆おうとしたので、ぐっつとペニスを突き込んでみた。みりみりい、と奥肉を拡張する感覚。かばつと遙が口を開いた。

「ふ……ふかい……おにいちゃんの、おくまでっ……ふぁあ、ううう！」

はらわたを押し上げられて、妹が顎を仰げ反らせる。血の繋がった兄に身体の奥深くまでほじられて、それなのに彼女の開いた唇から漏れるのは艶めいた嬌声であった。

昼下がりの保健室。陽光も眩しい部屋の中で、禁断の世界は温度を高めていく。

「遙ッ……遙っ……! 遙、遙、遙っ……! く、くあっ……!」

呻く。突く。呻く。突く。気持ちよすぎて、頭の中がどうにかなりそうだと。

膨れあがる快感は破裂寸前の風船だ。もういつ射精してもおかしくはなかった。

「お兄ちゃんっ、お兄ちゃんっ、お兄ちゃんっ、お兄ちゃんっ、お兄ちゃんっ……!」

遙もそうだ。兄に貫かれほじくられ悦んで、発情する少女肉は汗まみれ。制服に青い身体を透かし見せ、黒艶に輝くニーソックスをうねらせて身悶えている。

ごちゅぶ、にちゅぶごちゅぶ。兄のペニスに打突され、小柄な身体が揺らされると、アンパランスに大きな乳房が別のいきもの様にワントンポ遅れて揺れるのだ。ピンク色の乳首が弧を描き、二つの玉がぶつかり合うたびぴちやぴちやと肌の跳ねる音を響かせる。

その情景すら俊一の情欲を盛らせて、吐精の間際へと追いやっていく。

「ぐああっ! ……イクぞ、遙っ……出しちまうぞっ、俺っ……!」

「うんっ、うんっ! ほしい、お兄ちゃんのザーメン欲しいっ! いいよ、いいからっ! 妹のおマ○コでずりずりしているおちんぼから、どろどろのせーえき出してっ! 遙の中に、お兄ちゃんのドロドロせーえきジユクジユク染みこませてえっ!」

いつのまにか遙自身も腰を動かしながら、そんなおねだりをしてくる。



「んひいひい! は、はげひいひい! はひいひいひい!」

見開いた遙の瞳から涙が溢れ出す。黒目が半分上瞼に隠れていく。

制服に包まれたあどけない妹の媚体が、ヒクヒクヒクヒク痙攣を始めた。

「出すぞっ……! 妹のま〇こにアニキのザーメン射精するぞっ!」

呻き、首筋に筋を浮かべる兄の陰囊がきゅうつと収縮した。

「っ、ぐ、ぐあああ……!」

そして実妹の膣に搾られまくった肉根から大量の子種汁が噴出する。

びゅくるっ! びゅるるうっ、びゅく、びゅくびゅくっ!

「はひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひい! オマ〇コぐりぐりしながらあひゆいのドクドクだしてりゅううううっ!」

ドブドブと兄汁を膣内に注ぎ込まれた瞬間、遙は涙を流し仰け反った。

弓なりに反り上がっていく背中。柔い乳房が大きく波打つ。小柄な身体がビクビク痙攣し、遠慮もなしに注がれ続ける兄の特濃ザーメンの感触に恍惚と瞳を蕩かせた。

「イツてるっ、イツてりゅううっ! お兄ちゃんの熱いのどりよどりよでええっ! あふウウンッ! んっ! ふああ! おにいちゃんちんぽでイクううう——っ!」

ぶるっ、ぶるんぶるんぶるんっ! 盛大に肉乳を暴れさせ、絶頂へ至る遙。

細腰が震え、両脚がひくっひくっひくっひくっひくっひくっを繰り返す。

晒した喉が真っ赤に染まる。ツリ目がどろりと垂れ落ちる。ツイントールを切なげに揺

らし、遙は、タブーを犯す禁断のアクメに打ちのめされていた。

「遙っ……！！ 遙、遙、遙っ……！！」

どび……っ！ びゆるう……！！ びゅう、びゅ……！！

「ふああ、ああっ……流れ込んでくるうっ……お兄ちゃんのがあったかいの、私の中にドクドク入ってるよっ……熱くて、ヤケドしそう……」

粘膜の海で脈動する肉根が最後の一滴まで子種汁を注ぎ込む。乳房を揺らし、はらわたに大量の実兄精液を詰め込まれて、実妹はその禁忌に嬉しそうに微笑むのだった。

「お兄ちゃん……大好き」

「えへへ。えへへ。おにいちゃあん」

ベッドの上にあぐらを組む俊一の胸板に、遙が頬を寄せている。あんまりにも幸せそうな顔すぎて、引き離すことができない。ま、いいかと、俊一が嘆息していると。

「あにいっ！ 遙とエッチしたって本当ってあああ！ 抱っこしてるっ！ ずるいっ！」  
保健室の扉がガラリと開いて。登場したエレンが、こちらに向かって飛び込んできた。

「私も私もっ！ あにいにだっこしてもらおうのおっ」

「ちよ、ちよっどエレンっ！ お、重いっ……！！」

遙ごと覆い被さるようにして、纏めてベッドに押し倒される。

「ふふ。これから3Pかしら。爛れているわね」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫は、全巻の方向性でございませぬ。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!